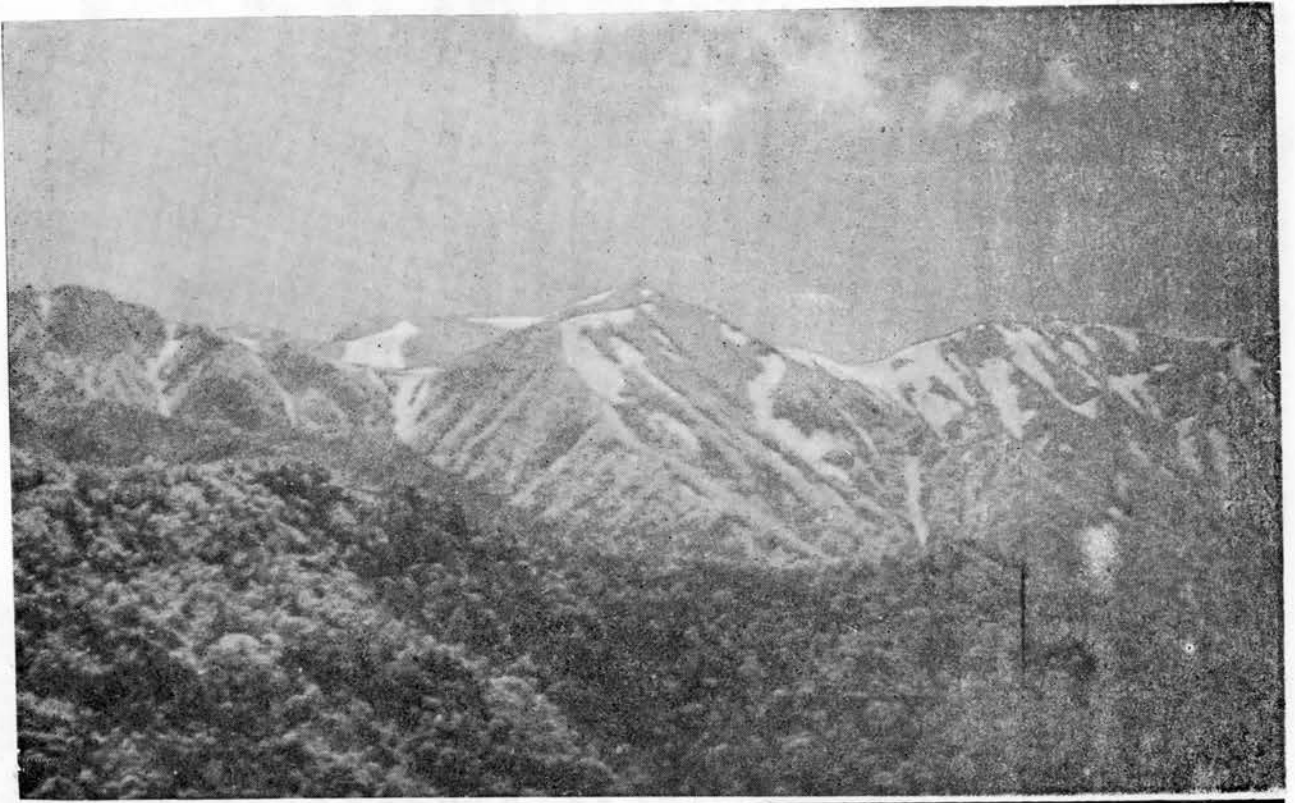


山と博物館

第15巻 第1号

1970年1月25日

大町山岳博物館



東天井岳の「仔犬」の雪型 (忍野崎より)

撮影 (5月中旬) 田淵行男

七〇年代を占う

戦略核兵器廃棄。

第二次朝鮮戦争勃発。

局地戦争なお続く。

日本経済の高度成長世界第一位。

排日運動起る。

国際通貨市場円買い白熱。

宇宙・海洋開発進む。

マス・レジャー(大衆余暇)は、国境、

大洋、宇宙空間を越える。

巨人旅客機墜落、九〇〇人死亡。

与・野党の勢力均衡。

安保条約廃止。

国会議員汚職、大量肅正。

ガンの病因発見される。

平均寿命五年延長。

健康保険制度統一、全面国営。

関東地方大震災、東京潰滅。

過密都市の開発中止、地方都市繁栄。

地方自治体再編成。

国土総合開発計画・もうかるときにだけ

協力する。

ポータブル電子計算機の出現、珠算塾大い

に栄える。

過疎と老人対策進まず、主婦よ！家庭へ

帰れ。

無気力、無関心、無責任。

人間疎外から人間相互間の連帯意識の復

活。

政府の仕事は先づ生活環境の浄化。

自然保護公害対策優先、産業開発制限。

公害対策をしぶる企業はすべて倒産。

野生動物の徹底的保護、狩猟の全面禁止

鉄砲をうちたい方はアラスカへどうぞ。

博物館や下水道のないところに人住まず。

清い空気 輝やく太陽 映える緑

(山大)

山の犬

—信州伊那地方の事例—

向山雅重

村松家の守り神

長野県下伊那郡天竜村神原向方(むかかた)の村松家では、ヤマノイヌの頭骨を、家の守り神として祀っていた。

その由来については、この地方にふるくから勢力をはっていた熊谷家について記した「熊谷家伝記」に詳しく記されている。

明徳二年(一三九一)辛未、伊勢の国鈴鹿郡久我庄岡郷の地土、村松兵衛尉菅原正氏といふ者が、この地の見遠といふところに隠れ

住み、そこを切拓していたが、それから三年たった、応永元年(一三九四)甲戌に、只今までの住所より南方に当る向うの方に、場所がよく、要害もよろしい土地があるので、「向方」と名づけ、屋敷場を見立てて引移った。

この村松が、向方に屋敷場を見立てる時、狼が一疋出てきたので、村松親子が追いまわすにげ、追うのを止めると立ちもどり、ついに、場所のよい所にならぬので、村松が立寄って、これを討ち取った。

そのあたりは、前後がひらけていて宜い所なので、ここを屋敷と定め、普請をして、ここに引移った。ところが、その翌年の正月、村松の家内がいささかわずらうことがあったそこで、陰陽師をたのんで、口よせをしてもらった。その口よせのことばに

「我は、おまえが信ずる山の神である。お前が、山道に迷い、永代の住所を見損いそうなので、道案内をした。ところが、お前は、この自分を討ちとめてしまった。自分を討つたことはいとわれないが、その報いの供養をしないのはうらめしい。」

と、涙を流して語った。

「その、狼のあたまを拾ってきて、家の内に祀ります」

と、かたく誓ったので、陰陽師は顔色をやわらげ、

「永代、この家の守護の神となるであろう。」と、いい、この家の主婦についていた山の神は、はなれて、主婦のわずらいはすっかりよくなった。——

と、いうのである。

村松氏は、さっそく、先年討ちとった狼—ヤマノイヌ—の、あたまを拾ってきて、これを「山の神」の御神体として家の神棚に祀り、それを家の守り神「お犬様」として、代々あがめ伝えてきた。

その「お犬様」は、ながく、村松家に祀り伝えられてきたが、昭和六年(一九三一)、村松家が、故あってこの地を去り、名古屋に移るとき、家屋敷を人手に渡し、このお犬様を、家の後の太子堂の傍に小祠を作り、そこに祀って置いて行かれた。

忠 犬 霊 骨 納

ひとびとは、このお犬様を尊信し、祠の扉を開けるようなことは、決してしないのであるが、昭和三十二年八月十四日、縁あってはじめて開扉する席に連ることができて、親しくそのお犬様を拜することができた。

口 碑

一、此ノ霊骨ハ、応永年間、当村ノ開祖、村松兵衛尉氏、当地発見ノ際、同氏ノ案

内トナリシモ、其ノ動作ヲ覚ラス、只、山狗ナルヲ恐レ、之ヲ危害ト思ヒ、遂ニ斬捨タリ。然ルニ兵衛ハ、全ク吾ニ忠犬タルヲ推察シテ、此ノ遺骸ヲ祭、永遠ニ吾ガ家門ノ守護ノ神トシテ崇ヘリト、口碑ニナル。云々。

維時、昭和六年五月二日
当時戸主村松実ハ事状ニ依リ、当邸ヲ去ルニ付キ、誌之。

この上箱の中に、御神体を入れた木箱が納っている。

箱は、割取り材を、ヤリカンナ(槍鉋)かセなどで削った板で入念にこしらえてある。その深くかぶさっている蓋をあけると、ご神体のヤマノイヌの頭骸骨が出てきた。

ながい年月、家の内に祀られていたためか焚き火の煙などで、いつとなく、ふすぶれてきたものであるうか、漆でもかけたかと思われるほどに黒い。

すでに下アゴの部分はなく、牙も右側は脱落してなく、奥の歯も、やはり右側二本が、近い年ごろに脱落したらしいあとをみせている。頭骸骨の前後の長さ二二・七センチメートル。

これが、「家伝記」のつたえるごとく、六百年を経てきたものかどうかは、にわかには断ずることができないとして、ながく家の守り神として、「お犬神」とあがめられてきた重さのせまるものがあり、箱を納め、祠の扉を閉して、ほつとするとともに、その神

去来して、思わず吐息がもれたのであった。

光前寺の早太郎

長野県駒ヶ根市赤穂、宝積山光前寺は、中央アルプス西駒ヶ岳を指呼のうちにのぞむ景勝の地にある天台宗の寺院であるが、ここに早太神の伝説がある。

正和年中(一一二二—一一二六)に、遠州府中(磐田市)の天神社の怪神を退治して、里民の苦を除いた「早太郎」といふ霊犬がある。

この天神社の祭の前に、年ごろの娘のある家の屋根に白羽の矢がたつ。すると、その娘は、祭にイケニエ(懸)として祭壇に供えられなければならない、その夜更け、このイケニエは神に召されて、ふたたび、姿をあらわすことがない。

ある年、あまりに不審に思った旅の僧が、ひそかにうかがい見るに、夜更けに、あやし



光前寺「本堂」

駒ヶ根博物館編「光前寺」より

のものが、あらわれて、よろこび、舞いおどり、

「このことを、信州信濃の、ヘエボウタロウに知られるな。」

と、うたいはやして、イケニエをさらうと共に、いづこともなく影を消してしまった。

そこで、土地の者は、信濃路にヘエボウタロウというものを探しもとめたところ、この光前寺に、「灰坊太郎」の名のように、毛色が灰色で、ただけしい犬が飼われていた。寺に乞うて、その犬を借りうけ、あくる年の祭に納めて祭壇に供えておいた。

夜ふけて、あらわれた怪しげな神とたたかい、それを倒したが、深い傷に、やがて、灰坊太郎も息をひきとってしまった。

ひとびとは、この灰坊太郎の功績に報いるため、天神社の社僧一実坊弁存が筆写の筆写の大般若経六百巻を、正和五年(一一三六)丙辰卯月八日に光前寺へ施入したという。

その大般若経というのが寺に伝えられており、古風な石壇風な、早太郎の墓が寺内に祀られてある。

灰坊太郎は、怪神とたたかいて、それを、うち倒したほどのはたらきをもって、いたところから、「霊犬 早太郎」とあがめられたきたわけである。

正和年中 霊犬 早太郎



信州光前寺

光前寺

早太郎護符

光前寺の本尊は不動尊である。この不動尊のお使いとして、犬は昔から信仰されてきていた。その光前寺にヤマノイヌの仔がすみついて育てられ、それが、こうしたはたらきをしたという伝説は、不動尊の靈験をさらにあらたかならしめるものとして、ふるくから、ひとびとに語り伝えられ、その信仰をあつめる所縁となつていったということが出来るであらう。

この光前寺の寺内の念仏堂に、体のがっしりした坊さんがいた。

秋の日ざしのあたたかい日に、とりいれた大豆を、むしろにひろげて、植でうっていたとき、ふと気がつくときヤマノイヌが、そばへ来て、じつとこちらを見ていた。

そこは剛腹な坊さんだから、知らぬ振りをして、不意にとびかき、馬乗りになつてうまくヤマノイヌの両耳をつかんで、頭を押えつけてしまった。

そして、大声をあげて飯たきばあさんよとび、「植を取ってくれ」というが、ばあさんはこわくて、ふるえていて、近寄れない、そこで、だんだんいさるようになって、今まで豆を打っていた植に近づき、それを取ろうとしたひょうしに、右腕へかみつかれた。

しかし、気づよく植をにぎって、ついに叩き殺してしまつたが、この傷がもとで病気に

なり、つい、亡くなってしまった。

これは、ヤマノイヌが、狂大病みたいなものになつていたのではないかとわかれていたこの話は、文久ころ(一八六一〜一八六三)のことで、そのころ、十三歳であつた後の光前寺住職吉沢義道師の話で、弟子の光前寺住職吉沢豊道師が、筆者に語つたところである

中央アルプス山麓の、この光前寺へ、百余年前に、たしかにヤマノイヌが出たことは、この話ではっきりする。

山の大退治

この光前寺にほど近い、上穂村(駒ヶ根市赤穂)で、天保十五年(一八四四)に、ヤマノイヌを退治した記録がある。(庄屋、小町谷権三郎の役目日記)

九月三日、長右衛門の女房と、栄蔵の伴(せがれ)の二人がきて、「北原、女体、へ山ノ犬が日中に出、藤右エ門が馬を番原(馬を放牧する原をいうことば)へ出しておいたところを、食ひ倒してしまつたから、夜昼共に油断成り難く思われますから、村中の惣人足で、犬を殺していただきたい」と願ひ出してきた。

しかし、イノシシやシカとは違い、とても追ひ散らすことは出来難いから、猟師へ申付け、撃ちとらせるのがいいというので、村役の大北と相談して、そう定め、猟師清吉・伊三郎の二人に、テコとして自分とも三人が揃つて、唐松新田(上穂のうち、一ばん山付きのムラ)の金左エ門のところへ八つころ(午後二時)行き、そこで三人をふやして、手分けで所々へ行つた。

ところが、猟師中へ焙硝一斤を渡してほしいというので、町方へ金左エ門をやり、一斤買わせて、それを一人前、二十匁づつ渡し

た。

九月六日、猟師清吉が来て、「けき、横前新田(唐松新田の南、一ばん山付きのムラ)の上で山犬を一疋打つた」と届出た。そこで村役人五人が見分にいつてたしめられた。

九月十四日に、この山ノ犬退治の費用の精算をした。

一、金一分 犬代
一、金二分 猟師手間
一、二匁二分四厘 四十三工(日)半之内
外二、焙硝一斤 十六匁

此分、玉葉外二遺候
一、五十八匁二分四厘

つまり、このヤマノイヌ一疋の退治に、手間日数、延四十三日半掛り、褒美、手間、玉葉代等、総入用が銀五十八匁二分四厘かゝつたわけである。

当時の銀相場を、金一両に銀六十匁とみるに、ほぼ金一両に近い費用が掛つたということになる。

ヤマノイヌの害を防ぐということに、なみなみならぬ村入用がかかるということととも、ヤマノイヌ一疋が出てきても、馬を食ひ殺すほど害がひどかつたことがわかる。

おくり犬

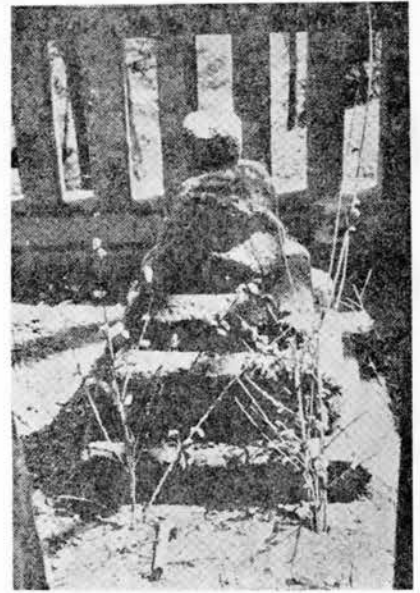
昭和十六年、上伊那郡赤穂町中割(現・駒ヶ根市赤穂)の大北家、北村政胤氏(七十七才)の談。

昔はヤマノイヌが多かつた。となりの源九郎じじが、光前寺へ行つていたが、よくその帰りに、ヤマノイヌにおくられたそうである。いつか知らぬまに後をつけてくるので、用心しながらくると、途中の塩木の林をぬけると、たいがいはなれてしまふ。

コケル(転ぶ)と、とびつかれるから、こけないように気をつける。

山のもの、火を一番おそれるから、火打を打つて、タバコを吸いはじめると、その火をみて逃げ出す。

朝早く、山仕事などに行く時は、食わえキセルを歩いて行く。するとヤマノイヌがいてもよけるからいい。それでないと、馬がフウフウ言つていて動かないので、気づいて見たらヤマノイヌが道ばたに眼を光らしていたなどということが多い。



光前寺より「光前寺」の狐師、兼子一之城さん

家では、馬がふうふういって、おどろいて逃げたので、これはおかしいと探しにいて、骨を拾ってきたという。昭和二十五年十月十五日、入野谷の奥、上伊那伊那里村奥浦(現・長谷村・ムラはすでない)の狐師、兼子一之城さんの話。

昭和二十五年十月十四日、上伊那郡藤沢村(現・高遠町)の秋山つる(八十才)さんの話。この辺は、中馬(チヌウマ・馬追)かせぎで家をおこした家が多い。馬を三匹も四匹もち、甲州の蕪崎に通い、また諏訪へ日帰りとかせいだものである。

金沢峠を、日が暮れてから越えてくると、犬におくられる。このオクリイヌをよけるために、おムスビをにぎって、赤ミノをつけたものを用意していった。

オクリイヌに出あうと、このおムスビを投げてやる。ヤマノイヌがそれをよるこんで食べている間に、無事帰ってくる事ができるというわけで、このムスビのことをトウゲムスビ(峠握飯)という。ヤマノイヌは塩気をほしがるから、このムスビが、オクリイヌを除けるによかったわけ、中馬追いの人は、夜道の用心で、この峠握飯をきつと用意していったもので、ヤマノイヌに送られると、なげるものとなっていた。

それ、中馬追いで、ヤマノイヌに食われた人はいない。けれど、うっかりしていて、食われた人はいない。北原(藤沢のうちのムラ)の、馬喰さでシロエさんの家、トクサという人のおぢいさま。この人が、金沢峠の裾で、ヤマノイヌにおどされて、乗っていた馬から落ちて食い殺されてしまった。

次(へ)狐に行っていて、犬を小舎の外につないで置いて寝ていたら、夜なかに、犬がえらい勢いでとびこんできたが、何のこともだかわかない。

四十七、八年前だ。小瀬戸(三峯川の支流)が、小瀬戸(三峯川の支流)の西側を、ヤマノイヌが通った足あとがあった。そのヤマノイヌの臭いがわかって、犬はとびんできたらしい。同、十月十七日、同じく入野谷の奥、上伊那郡伊那里村塩平(現・長谷村)の宮下吉蔵(五十三才)さんの話。

晩方、塩を持って歩くものではない。もし、必要があって、持って歩くときは、上へオキ(燬)をのせていくものだ。夜、塩を借りにいくとき、「オキをのせてもらってこい」といった。昔の人はかならずそういった。これは、塩分をほしくて、近よってくるヤマノイヌを用心してのことである。塩を持って歩かない。どうしても持って歩く必要のあるときは、火をのせていく、と、いうのは、山深い土地の人の心掛けとして心うたれる。

オクリイヌは、「どっこいしょ」と言えどかじられない。家で飼っていた犬が、ヤマノイヌに食い殺されたことがある。クルマヤの方で食われたことがある。けれど、自分が覚えてからはヤマノイヌの姿は見ない。家のお祖父さん(七十七才で死)の話だが、ヤマノイヌが庭のあたりに来たことがあった。上のクボあたりで啼いていた。などと話して

くれた。これらを総合してみると明治のなかばころまで、ヤマノイヌは、信州伊那の山の村にいたことはたしかであると、いろいろである。

山住様・三峯様

昭和八年九月二十二日から二十四日、下伊那郡上村程野——南アルプス山麓のいわゆる遠山地方の奥地で、イノシシの害を防ぐさまを見た。

夜のうちにでてきて、畠の作物をくい荒してこまるので、いろいろな工夫をしている。ソメといって、鉋屑などへ石油を浸したものをたたり、女の髪の毛を棒へつけて置いたりする。

カコといって火を点すやり方もある。ポロの長い紐(火をつけ、その悪臭と火の色でおどすもの)。カンテラを提灯の中へ入れてつるしておいたり、収獲期などは、シシ小屋で大きなたき火をしつらする。

ドウツギキといつて、流れ川に添水(そうず)を仕掛けて音をたてる。シシ小屋で大きい焚き火をしながら、石油かんなどをたたいてのシシ追いもある。

また、畠のまわりへ、シシワチといつて、すっかり柵を結って、猪が入れぬようにしているところもある。こうして、イノシシの害を防ぐことに努力しても、いつか、すきを見て、畠の作物を食い荒されてしまう。

一晩に五疋もでてきて、畠のイモなどをほると、人が百日ぐらいかかって掘ったくらいは、掘り荒してしまふ。シシオイをして、ちよつとのゆだんで、居眠りをしていた、そんなすきに、すっかり畠をやられたなどということが多い。

そこで、神だのみをすることになる。

山住様(遠州山住神社)や、三峯様(武州三峯神社)、これは、いずれもヤマノイヌを使者としている神であるが、神様を迎えてき

て、畠を守ってもらう。

上村程野の鎌倉知義氏談——「去年は、シシワチを二重にもこしらえたり、シシ小屋で追ったりしたが、今年山住様をたのんできたから追わない、山住様が追ってくださるから絶対に追わない、作の中へ入っても荒さずにとんで出てしまふ。」

程野の某氏談——「去年はシシオイに出た二、三人が山住様を迎えてきただけであったが、それらの人は助かり、その仲間にならぬものは食べられた。それで、こしは、村中山住様を迎えてきてやっている。皆、祈禱してやっているが、効めがたしかにあるので感心している。上程野の蚕玉様のところへ山住様を祀っているが、ご飯、洗米、お燈明を供える。供えにいく人は体を浄めていく。山住様を迎えてきた仲間の者が、交代でお供えに行くのである。」

上村八丁島高村末吉氏談——「この辺では三峯様をたのんできた。代参が行って日限をきって借りてきたが、お札を煙の周りにたててあるだけで番をしないが、こしは三峯様にまかせきりで、ちよつとも出ない。こしはじめてだが、三峯様が効く。」山住様や三峯様のお札は、箱へ納めたり、一枚板(ちよつと屋根をつけたものへ張ったりして、畠の中や、その畔などへ祀っておく。

八月のお盆すぎに、代参がお詣りして、お金を出して、ご祈禱をしてもらい、十月末ころまで日を限ってかりてくる。返すときにお札を持っていく。

山住様、三峯様をかりてきたら、ソメヤシシオイは禁物、どこまでも信じればよい。疑うことはいけぬ、と言っている。(四五・一・一八稿)(長野県文化財保護委員)

山と博物誌 第15巻 第1号
一九七〇年一月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEB大町三三三
大町山岳博物館
印刷所 大町市下中町 大糸タイムス印刷部
定価 年額 三〇〇円(送料共) (切手不可)